

## ケニアの東海道線を走る

あれは1968年1月のことだった。かなり旧聞に属する旅であるが、いま思い出しても新鮮な興奮が蘇ってくる。復路はハッピング満載の長距離バスで戻ってきたが、往路の寝台車の旅もなかなかオツなものだった。ケニアの2大都市を結び、アフリカ大地のサヴァンナ地帯を走り抜ける530kmの旅である。暑い日中にナイロビ中央駅でインド洋岸のモンバサまでの座席指定券を買い求めた。涼しくなった夕刻7時にナイロビを離れた列車は、ゆっくり東へ向かって走り出した。長い編成のディーゼル列車は最後部が木製マホガニー塗りの旧式寝台車で、コンパートメントは3段ベッドの一室だった。比較的空いていると思っていた車両だが、出発直前になり2人の黒人紳士が慌ただしく乗り込んできた。ケニア政府の役人と中央銀行員で、旧宗主国イギリス留学組のエリートだった。翌朝モンバサ駅到着までの間、私たちはケニア経済の発展と将来性について、熱心に語り合った。彼らはローカル風景を眺めながら、ケニアの将来とビジョンについて夢を語ってもくれた。

平坦なサヴァンナ地帯を列車は坦々と走る。空気が澄んでいるからだろうか、日没を迎える頃に西方の空が真っ赤に染まり、夕焼け空を全天空に演出してくれた。列車はゆっくり走っている。銀行屋さんの案内で車両の見学に出掛けていった。3等車両には、荷物の中に溢れんばかりの人々が喘いでいるような気がした。中には、数羽の鶏を押し込めた竹籠を抱えている黒人もいた。網棚に寝ているインド人もいた。立錫の余地もない車内を進むのは難儀である。そのうえ、どうにも耐えられないのは、醸し出されてくる特有の匂いだ。これこそがケニアの体臭なのだろう。乗客の人間模様を見ているだけでも興味をそそる。うっかりすると動物小屋に閉じ込められているような錯覚に陥る。

こういうローカル列車で人々に接しても、エリート氏の語る「ケニアはアフリカの中で最も将来性に富んでいる」「最も部族対立が少ない」「経済発展と安定はケニヤッタ大統領のおかげ」という言葉はすぐにはピンとこない。しかし、彼らの周囲には危険の影がない、沿線風景にも「どん底」の印象がなく、何と云っても接するケニアの人たちの表情が、みな明るいのがいい。彼らはケニアの将来に期待しているのだということを実感した。

車内の酒盛りを適当に切り上げベッドに潜り込み、役人さんから起こされたのはもう太陽が昇り、目的地モンバサまであと1時間足らずの地点へ迫っていた時だった。椰子の木や果物が南方のノスタルジアを掻き立てる。朝8時半モンバサのプラットフォームへ静かに滑り込んだ。驚いたことに、定時に僅か5分の遅れでしかなかった。2人のエリートと別れ、駅で紹介してもらった駅前旅館へ向かった。旅館への道すがら声をかけてくれる地元の人々の明るい声と笑顔が、ケニアの将来とこれからのモンバサ滞在に大いなる期待感を抱かせてくれた。

(近藤 節夫 記)